Japanese Association of Educational Psychology

教育心理学研究, 2009, 57, 393—406

中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連

—— 2種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連 ——

濱口佳和* 石川満佐育** 三重野祥子***

本研究は，中学生の反応的攻撃性と能動的攻撃性の因子構造を明らかにするとともに，これらの攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連性を明らかにするために行われた。濱口（2004, 2005）が開発した中学生用の反応的攻撃性尺度と能動的攻撃性尺度，CES-D（抑うつ尺度），14の反社会的行動欲求項目が，中学生男女603名を対象に実施された。検証的因子分析の結果，反応的攻撃性，支配的能動的攻撃性，利己的能動的攻撃性の斜交3因子モデルが最適であることが明らかにされた。また，抑うつ傾向には男女とも反応的攻撃性が有意な関連を示したのに対して，能動的攻撃性は有意な関連を示さないこと，反社会的行動欲求には男子では3種類の攻撃性のすべてが，女子では支配的能動的攻撃性のみが有意な関連を示すことが明らかにされた。反応的攻撃性と能動的攻撃性が中学生の心理社会的適応に異なる役割を果たすこと，3種類の攻撃性の相互相関や，これらの攻撃性と反社会的行動欲求との関連について性差が存在することが示された。また，従来指摘されていた青年の行為障害と大うつ病性障害の併存率が，反応的攻撃性によってもたらされる可能性があることが指摘された。

キーワード：反応的攻撃性，能動的攻撃性，抑うつ傾向，反社会的行動欲求，中学生

問題と目的

従来人間の攻撃行動は，その機能や生起メカニズムの観点から，異なる2つのサブタイプに分類されてきた（Feshbach, 1964）。Dodgeとその共同研究者達はこれらのサブタイプを，反応的攻撃（reactive aggression）と能動的攻撃（proactive aggression）[1]と命名した（Dodge & Coie, 1987）。

Dodgeらによれば，反応的攻撃は敵意的攻撃(hostile aggression : Feshbach, 1964）とほぼ同義の概念で，以下の諸特徴をもつ攻撃行動とされている（Dodge, 1991 ; Dodge & Coie, 1987 ; Price & Dodge, 1989）。①欲求阻止や知覚された脅威などの嫌悪的な先行事象によって引き起こされる。②怒りの喚起・表出を伴う。③自己を防御することや嫌悪事象に危害を加えることを目標とし，知覚された脅威を軽減する機能を果たす。

一方Dodgeらは，能動的攻撃を道具的攻撃（instrumental aggression : Feshbach, 1964）とほぼ同義の概念で，以下の諸点によって特徴づけられる攻撃行動としている（Dodge, 1991 ; Dodge & Coie, 1987 ; Price & Dodge, 1989）。①怒りや攻撃行動を誘発する嫌悪的な先行事象がない状況で始発される。②怒りや不快情動の喚起・表出を伴わない。③何らかの外的な目標の達成を意図した手段的な攻撃行動である。

反応的攻撃と能動的攻撃の実証的研究は，発達心理学領域においてはDodge & Coie（1987）が教師評定用の尺度を作成して以来，主に男子児童を対象に進められ，児童の反応的攻撃・能動的攻撃の個人差と社会的行動，仲間関係，後の心理・社会的適応との関連について，既に多くのことが明らかにされてきた。しかしながら，青年期以降における反応的攻撃性・能動的攻撃性についての研究は，近年米国において16歳男子を対象に，行動特徴に着目した個人差測定尺度が開発され，パーソナリティや心理社会的適応との関連が検討され始めたばかりである（Raine, Dodge, Loeber, Gatzke-Kopp, Lynam, Reynolds, Stouthamer-Loeber, & Liu, 2006）。現時点では，①中学生の年齢段階も含めた青年期全般における反応的攻撃・能動的攻撃の個人差と，現在および後の成人期における心理・社会的特徴や不適応との関連はまだ十分明らかにされていない，②女子の反応的攻撃・能動的攻撃の個人差に関する知見が乏しいという問題点がある。

このような問題意識に立脚し，濱口（2004, 2005）は，

* 筑波大学心理学系 yhama@human.tsukuba.ac.jp
** 筑波大学附属学校教育局
*** 社会福祉法人十愛会地域療育センターあおば

[1] "proactive aggression" に対する日本語の定訳はまだない。本研究では，「状況に積極的に働きかけることにより状況をコントロールする」という"proactive" の言葉に最も近い自然な日本語として「能動的」という言葉をあてた。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

中学生男女を対象に認知，欲求・動機づけといった内的特性の観点から反応的・能動的攻撃の個人差を測定する尺度を開発している。反応的攻撃性尺度は，他者に強いられた嫌悪事象下で反応的攻撃行動に導く，怒りと報復意図という2つの内的特性の個人差を測定する尺度である（濱口, 2004）。一方，能動的攻撃性尺度は能動的攻撃行動を始発させる，仲間支配欲求，攻撃的方略に対する有能感（以下「攻撃有能感」と略す），攻撃的方略に対する肯定的評価（以下「攻撃評価」と略す），個人的欲求への固執（以下「欲求固執」と略す）の4つの内的特性の個人差を測定する尺度である（濱口, 2005）。いずれの尺度も満足な信頼性と他の自記式攻撃性尺度や教師評定による攻撃行動傾向尺度による併存的妥当性が確認されている。

本研究の第1の目的は，中学生男女を対象に，濱口が開発したこの2つの攻撃性尺度を用いて反応的攻撃性と能動的攻撃性の因子構造の検討を行うことである。因子構造の検討は，濱口（2004, 2005）が内的特性の観点から構成した能動的攻撃性ならびに反応的攻撃性の尺度が，主に行動傾向の観点から構成されたDodge & Coie（1987）の能動的攻撃・反応的攻撃に対応する因子構造を実際に示すことを確認する上で必要である。

ここでは検証的因子分析により，攻撃性の因子構造の検討を行う。教師評定尺度を用いて児童を対象とした従来の研究では，反応的攻撃行動傾向と能動的攻撃行動傾向は高い相関を示しながらも，探索的因子分析でそれぞれ異なる因子として抽出され（Dodge & Coie, 1987），検証的因子分析では，1因子モデルより2因子モデルの方が適合度が高いことが知られている（Poulin & Boivin, 2000a）。これらから，6下位尺度（反応的攻撃性2, 能動的攻撃性4）のすべてがひとつの因子（潜在変数）を構成すると考える1因子モデルよりも，怒りと報復意図からなる反応的攻撃性因子と，仲間支配欲求，攻撃有能感，攻撃評価，欲求固執からなる能動的攻撃性因子の2因子構造を持ち，この2因子間に相関を認める斜交2因子モデルの方がよりよい適合度を示すことが予測される（仮説1-1）。

ところで，Price & Dodge（1989）は，子どもを対象とした行動観察から，人指向的(person-directed)[2]能動的攻撃と物志向的(object-oriented)能動的攻撃の2つのサブタイプの存在を指摘している。

人指向的能動的攻撃とは，直接人に向けられ，他者を支配することに方向づけられた攻撃行動である。「いじめ(bullying)」がその典型と考えられている。本研究で使用する能動的攻撃性尺度の内，仲間支配欲求は仲間を支配し，思うままに働かせたいという欲求の強さで，能動的攻撃性の人指向的な側面を強く反映すると考えられる。また，攻撃有能感は，対人葛藤状況において攻撃的な方略を使用することで，相手を従わせ，葛藤を有利に解決できるという自信の強さを意味することから，やはり人指向的な側面により強く関わる下位尺度と考えられる。よって，仲間支配欲求と攻撃有能感は人指向的能動的攻撃性の因子を構成すると考えられる。なお本研究では，仲間支配欲求と攻撃有能感の項目内容を考慮し，人指向的能動的攻撃性を支配的能動的攻撃性と呼ぶこととする。

一方，Price & Dodge（1989）の物志向的能動的攻撃は実利に方向づけられた（object-oriented）能動的攻撃[3]で，物，場所，特権などの獲得を目指す攻撃行動である。これは例えば「他の子が持っているボールを取り上げる」のように，社会的ルールや他者への配慮を軽視して，実利獲得のために他者を傷つける利己的・実利追求的な攻撃行動と言える。こうした行動は，①自分が欲しい対象物に利己的に執着するという点で欲求固執（自己の望むものは他者を押しのけてでも，手に入れたいと願う利己的な願望の強さ）と，②相手の心や社会的ルールへの配慮のなさ，という点で攻撃評価との関連が強いと考えられる。攻撃評価は，攻撃行動による他者の心理面への悪影響を過小評価し，攻撃行動を正当化する認知傾向の強さである。これは，Goldstein, Glick, & Gibbs（1998）では，「最少化・ミスラベリングの思考の錯誤（error of minimizing/mislabeling）」と呼ばれ，「攻撃行動への抑制を弱め，良心の呵責を中和することによって，自己中心性に寄与する」（Goldstein et al., 1998, p.103）と位置づけられており，欲求固執と密接に関連するものと考えられる。また，欲求固執と攻撃評価の項目は，自分の行為が他者の欲求や感情を損なうことへの配慮を欠くという利己的な思考と欲求が直接反映されている点で共通している（欲求固執は「人をおしのけてまで」，「人がどう思おうと」など：攻撃評価は「相手の心は傷つかない（逆転）」，「みんなに嫌がられる」など）。以上のことから，「欲求固執」と「攻撃評価」の2つの特性は，社会的ルールや他者への配慮を欠く点で共通性があり，ともに利己的に実利を求める能動的攻撃性を構成すると考えられる。本研究ではこれを利己的能動的攻撃性と呼ぶことにする。

[2] "Person-directed"は「人に向けられた」という意味なので「人指向的」という訳語をあてた。

[3] Price & Dodge（1989）では，道具的攻撃（instrumental aggression）と呼ばれている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

支配的能動的攻撃性ならびに利己的能動的攻撃性，そして反応的攻撃性の3者は，攻撃性というひとつの構成概念の異なる側面であるため，互いに正の相関を持つと考えられる。以上から，反応的攻撃性，支配的能動的攻撃性，利己的能動的攻撃性の斜交3因子モデルを想定することが理論的には可能である。斜交3因子モデルは，3つの攻撃性（反応的攻撃性，支配的能動的攻撃性，利己的能動的攻撃性）の組み合わせによるモデルとしては，最も精緻化されたモデルであるので，最も適合度の高いモデルであると予想される（仮説1-2）。

本研究の第2の目的は，反応的攻撃性と能動的攻撃性が，反社会的行動欲求と抑うつ傾向にどのような関連を示すかを明らかにすることである。

米国を中心とした先行研究では，児童期に既に能動的攻撃が優勢な高能動的攻撃児は，社会的スキルに長け（Day, Bream, & Pal, 1992；Dodge & Coie, 1987），高能動的攻撃児同士なら相互選択的友人関係もある程度形成・維持でき（Poulin & Boivin, 2000a, 2000b），目標達成の手段として攻撃行動を高く評価していることが知られている（Crick & Dodge, 1996）。さらに，児童期の能動的攻撃行動傾向は青年期の非行行為や非行関連暴力，反抗挑戦性障害傾向や行為障害傾向を予測することが明らかにされている（Brendgen, Vitaro, Tremblay, & Lavoie, 2001；Vitaro, Gendreau, Tremblay, & Oligny, 1998）。一方児童期に反応的攻撃が優勢な高反応的攻撃児は，社会的スキルが乏しく（Day et al., 1992；Dodge & Coie, 1987），仲間から拒否され，孤立しがちであり（Poulin & Boivin, 2000a, 2000b），挑発場面や葛藤場面の認知に歪みがあること（Dodge, Lochman, Harnish, Bates, & Pettit, 1997）が知られており，児童期の反応的攻撃行動傾向は，親密な異性関係における暴力使用のみならず，不安障害や引っ込み思案などの内在化問題を予測することが知られている（Brendgen et al., 2001；Vitaro et al., 1998）。この様に，高能動的攻撃児と高反応的攻撃児は社会的認知，社会的スキル，仲間関係においてそれぞれ異なったプロフィールを持ち，青年期において示す心理社会的不適応にも質的相違があることが示唆されている。従来の研究では，能動的攻撃・反応的攻撃の個人差は児童期を対象に，教師評定の行動評定によって測定されてきたが，本研究では中学生の自己評定により認知，感情，動機づけの内的側面から2種類の攻撃性の個人差を測定する尺度を用いる（濱口，2004, 2005）。内的側面から測定した場合でも，能動的と反応的の2種類の攻撃性が，心理社会的不適応の諸測度と異なった関連のパタンを示すか否かの検証は，まずは濱口（2004, 2005）の尺度の妥当性の検討上，重要な問題である。そしてこの問題の検証はさらに，青年期における外在化問題ならびに内在化問題の発現機序について新たな知見を得る上でも重要な意義を持つと言える。そこで本研究では，外在化問題として反社会的行動を，内在化問題として，これまで検討されてこなかった抑うつ傾向をそれぞれ取り上げ，能動的攻撃性ならびに反応的攻撃性の関連を検討する。

本研究では反社会的行動として，中学生の生徒指導上の問題行動としてよく取り上げられるものを対象とする。反社会的行動には欲求と実行との間に少なからずズレがあるが（前田・中條・樋口・山口，2001），本研究では，個人内にある純粋な反社会的行動傾向として反社会的行動への欲求を位置づけ，これと反応的・能動的2種類の攻撃性との関連を検討する。

能動的攻撃性は自己の目的実現のための攻撃行動を導く内的特性とされている。既に述べたように，児童期の能動的攻撃行動傾向は青年期の非行行為や非行関連暴力，反抗挑戦性障害傾向や行為障害傾向を予測することが明らかにされている（Brendgen et al., 2001；Vitaro et al., 1998）。さらに，Raine et al.（2006）では，深刻で暴力的な犯罪・非行を犯しやすいサイコパシー傾向（Hare, Clark, Grann, & Thornton, 2000）は，反応的攻撃行動傾向でなく，能動的攻撃行動傾向に関連があることが明らかにされている。以上から，能動的攻撃性は，反応的攻撃性の影響を統制してもなお，反社会的行動欲求と正の有意な関連を示すと予測される（仮説2）。

抑うつ傾向と反応的攻撃性・能動的攻撃性との関連については，能動的攻撃性の影響を統制した場合，反応的攻撃性は正の有意な関連を示すことが予測される（仮説3-1）。一方，反応的攻撃性の影響を統制した場合，能動的攻撃性は有意な関連を示さないことが予測される（仮説3-2）。以下にこれらの仮説の根拠を述べる。

児童を対象とした研究では，反応的攻撃性の強さは幼少期からの親による拒否的・虐待的養育や仲間からの被迫害経験と関連があることが明らかにされている（Dodge et al., 1997）。これは，反応的攻撃性が，親や仲間といった身近な重要な他者との関係の中で，頻繁に自己を傷つけられる脅威を経験する中で育まれることを意味する（Dodge, 1991）。ところで，親や仲間からの拒否的・被迫害的な経験の多さは，反応的攻撃性ばかりでなく，子どもの否定的な自己概念や低い自尊感情を形成するため，抑うつ傾向とも関連があることが明

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

らかにされている。例えば，親の懲罰的な養育態度（Laing & Eley, 2005）や，親から拒否された経験（Robertson & Simons, 1989）と，青年期の抑うつ傾向との間には，正の有意な関連があることが明らかにされている。また，抑うつ傾向は，仲間からの拒否や受容の低さ（Vernberg, 1990）や，いじめ被害などの仲間による被迫害経験（Slee, 1995）とも関連があることも知られている。このように，子どもの反応的攻撃性と抑うつ傾向には，その形成要因として親や仲間からの拒否や被迫害経験がともに挙げられる。これが両者間に有意な正の関連があることを予測する理由である。

これに対して，能動的攻撃性は抑うつ傾向とは有意な関連が見られないと考えられる。その理由は，能動的攻撃性の形成要因は，攻撃行動を行うことによって正・負の強化が得られる直接的・間接的な学習経験の多さ（例えば，攻撃シーンを多く含むTV番組などの視聴経験，近隣や家族内での攻撃行動の観察経験の多さ）であり（Dodge, 1991），直接的には親や仲間からの拒否や，被迫害経験の多さではないということである。実際，能動的攻撃性は，仲間からの被迫害経験の少なさや受容の多さと結びついているし（Poulin & Boivin, 2000b），その生育歴の中で，高能動的攻撃児は，親や仲間からの拒否・被迫害経験は普通児と比べて特に多いわけではないことも明らかにされている（Dodge et al., 1997）。以上の理由から，能動的攻撃性は抑うつ傾向とは有意な関連を示さないことが予測される。

方　法

調査対象者

茨城県・千葉県内の公立中学校4校の1～3年生21学級の男女生徒713名（男子375名，女子338名；1年248名，2年233名，3年232名）が対象となった。全学校において質問紙冊子は調査実施当日の出席者全員に配布・回収された。無記入のまま提出されたものはなく，回収率は100%であった。これらの内，欠損値のない603名（男子318名，女子285名：1年男子102名，同女子87名，2年男子98名，同女子95名，3年男子118名，同女子103名）のデータが分析対象となった。

調査内容

質問冊子は，能動的攻撃性，反応的攻撃性，抑うつ，反社会的行動欲求，学校満足度を尋ねる尺度から構成された。このうち学校満足度については本研究の分析には用いられなかったので，以後の説明は省略する。

自記式能動的攻撃性尺度（中学生用）　濱口（2005）により作成された30項目からなる自己報告形式の尺度で，仲間支配欲求（8項目），攻撃有能感（8項目），攻撃評価（9項目），欲求固執（5項目）の4つの下位尺度から構成されている。「あなた自身のふだんの様子や考え方について」それぞれの質問項目に「はい」「どちらかと言えばはい」「どちらかと言えばいいえ」「いいえ」の4者択一での回答が求められた。

自記式反応的攻撃性尺度（中学生用）　濱口（2004）により作成された12項目の自己報告尺度で，報復意図（7項目），怒り（5項目）の2下位尺度がある。教示文と回答様式は能動的攻撃性尺度と同一であった。

日本版CES-D　アメリカ国立精神衛生研究所により作成された自己評価尺度Center for Epidemiologic Studies Depression Scale（CES-D；Randloff, 1977）の日本語版である（島・鹿野・北村・浅井, 1985）。過去1週間を振り返らせ，20の抑うつ症状のそれぞれについて，経験した頻度を4段階で評定させ，合計得点を算出して抑うつ度を測定する。CES-Dは成人のみならず中学生に適用可能であることが確認されている（高倉・崎原・與古田・新屋, 2000）。

反社会的行動欲求　前田他（2001）の問題行動に関する24の質問項目の中から，他生徒の身体や所有物に対する侵害行為，器物損壊，窃盗・万引き，関係性攻撃，規則違反に関する項目を10選び，さらにこれらのカテゴリーに含まれる項目を4つ自作して追加した。自作した項目は，[4]「他の生徒に乱暴なことをする」，[7]「他の生徒の悪口や秘密を言いふらす」，[11]「自分より弱い者に，いじわる・嫌がらせをする」，[14]「規則違反の服装や髪型をする」であった。以上14項目のそれぞれについて，「あなたはこれまで，してみたいという気持ちになったことがどれくらいありましたか」と尋ね，「まったくなかった」(1)，「ほとんどなかった」(2)，「たまにあった」(3)，「ときどきあった」(4)，「しょっちゅうあった」(5)，「いつもしてみたいと思っていた」(6)の6件法で評定を求めた。

すべての尺度は表紙を含めA4版10ページの質問冊子に印刷された。表紙で学年と性別の記入を求め，無記名調査とした。2つの攻撃性尺度の項目はAppendixに掲載する。

調査実施手続き

調査協力の得られた各学級において，ホームルームや授業時間の一部を割いて，学級担任により集団一斉方式で実施された。回答は生徒各自のペースで行われた。表紙にはこの調査がテストではなく，学校の成績には一切関係がないこと，無記名調査のため，回答者が特定されることはないこと，どうしても答えたくな

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

い項目には回答しなくてもかまわないことが記されており，教師は生徒の回答の前にこれを読み上げた。

調査実施期間

2004年7月・9月。

結　　果

攻撃性の因子構造の検討

既に述べたように，反応的攻撃性2，能動的攻撃性4の合計6の下位尺度で測定される中学生の攻撃性は，a.1因子モデル，b.斜交2因子モデル(反応的攻撃性，能動的攻撃性)，c.斜交3因子モデル（反応的攻撃性，支配的能動的攻撃性，利己的能動的攻撃性）のいずれかのモデルで説明できると考えられる。

そこでまず，6下位尺度の階層構造を探索的に検討するため，階層的クラスター分析を実施した。本研究では6つの下位尺度が，反応的攻撃性と能動的攻撃性という2つのクラスターか，さらに能動的攻撃性が支配的と利己的の2つに分離し，反応的攻撃性を含めて全部で3クラスターに分かれることを想定しているので，大きなクラスターができにくく，サイズのほぼ等しいクラスターができやすい最遠隣法を採用した（繁枡・柳井・森，1999)。その結果，Figure 1に示すように，下位のレベルでは仲間支配欲求と攻撃有能感，攻撃評価と欲求固執，報復意図と怒りの3クラスターが現れた。これらのクラスターは，それぞれ，支配的能動的攻撃性，利己的能動的攻撃性，反応的攻撃性のクラスターと解釈できる。そしてより上位のレベルでは前2者がひとつのクラスターに融合するが，これらは，能動的攻撃性のクラスターと解釈できる。そして能動的攻撃性のクラスターと反応的攻撃性のクラスターは，最終的にひとつのクラスターに融合することが示された。なお他の方法でもクラスター分析を試みたところ，重心法でも最遠隣法と同様の階層構造が見られた。

クラスター分析の諸結果は前述のa～cのいずれのモデルも可能であることを示唆するものである。そこで各モデルの適合度を検討するため，検証的因子分析を，性別ごとならびに全体で行った（反応的攻撃性，能動的攻撃性，支配的能動的攻撃性，利己的能動的攻撃性はすべて潜在変数として，各下位尺度の得点を観測変数とした)。分析にはSPSS社製AMOS 5.0を使用した。パラメターの推定には最尤法を用いた。6下位尺度の相関行列をTable 1に，各モデルの適合度指標と標準化係数をTable 2に，そして各モデルにおける因子間相関をTable 3に示す。

Table 2に示すように，1因子モデルは男女および全体でAGFIが.90を下回り，RMSEAも.10を上回る値を示していることから，適合はよくないと判断された。斜交2因子モデルは，1因子モデルに比べれば，男子と全体でいずれも大幅なAICの減少が認められ，適合度の改善が示唆された。男子と全体ではGFI，AGFI，CFIの各適合度指標は.90を上回り，RMSEAも.10未満の値を示し，まず良好な適合度を示した。しかし女子では，1因子モデルに比べてAICの減少は比較的小さく，AGFIが.90未満，RMSEAが.10以上の値を示し，適合度に大きな改善はみられなかった。

以上から，仮説1-1は男子と全体については支持されたものの，女子については支持されたとは言いがたい。そこでさらに，仮説1-2の検証に進むこととした。

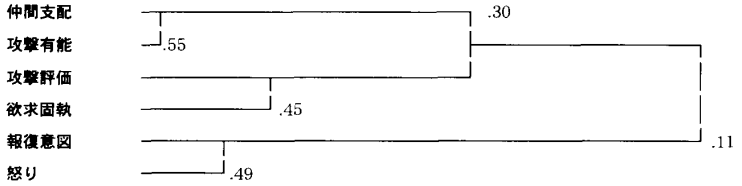

Figure 1　能動的攻撃性・反応的攻撃性下位尺度のクラスタ分析結果（最遠隣法）
(図中の数値は結合されたクラスタ間の相関係数)

Table 1　能動的攻撃性・反応的攻撃性下位尺度間相関

	仲間支配	攻撃有能	攻撃評価	欲求固執	報復意図	怒　り
仲間支配	－	.57***	.42***	.22***	.55***	.39***
攻撃有能	.53***	－	.33***	.28***	.49***	.26***
攻撃評価	.29***	.28***	－	.48***	.42***	.17**
欲求固執	.46***	.41***	.45***	－	.43***	.22***
報復意図	.45***	.39***	.31***	.32***	－	.49***
怒　り	.27***	.19***	.11*	.22***	.53***	－

下半分は男子，上半分は女子。　　$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Table 2 検証的因子分析の適合度指標と標準化係数

	1因子モデル			斜交2因子モデル			斜交3因子モデル		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
[適合度指標]									
χ^2	123.07	88.50	56.21	54.28	30.07	38.04	19.76	10.07	19.35
df	9	9	9	8	8	8	6	6	6
有意確率	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.003	.122	.004
GFI	.936	.917	.941	.971	.970	.957	.989	.990	.978
AGFI	.855	.807	.862	.923	.922	.888	.961	.964	.925
CFI	.879	.828	.906	.951	.952	.941	.985	.991	.973
RMSEA	.145	.167	.136	.098	.093	.115	.062	.046	.089
AIC	147.07	112.50	80.21	80.28	56.07	64.04	49.76	40.07	49.35
[標準化係数]									
仲間支配	.76	.72	.79	.78	.74	.81	.82	.77	.85
攻撃有能	.64	.65	.64	.66	.68	.65	.67	.69	.67
攻撃評価	.51	.47	.56	.53	.49	.57	.62	.56	.66
欲求固執	.60	.62	.59	.61	.64	.60	.74	.80	.72
報復意図	.70	.64	.74	.95	.97	.90	.94	.96	.90
怒り	.48	.43	.49	.52	.55	.54	.53	.55	.54

実線の囲み内の数値は潜在変数「反応的攻撃性」に対する標準化係数（斜交3因子モデル，2因子モデルとも）。斜交2因子モデルにおける点線の囲み内の数値は潜在変数「能動的攻撃性」に対する標準化係数。斜交3因子モデルにおける細かい点線の囲み内の数値は潜在変数「支配的能動的攻撃性」に対する標準化係数。同じく一点鎖線内の数値は潜在変数「利己的能動的攻撃性」に対する標準化係数。

Table 3 検証的因子分析における因子間相関

	全体	男子	女子
斜交2因子モデル			
能動的攻撃性 ⇔反応的攻撃性	.69	.59	.79
斜交3因子モデル			
能動的攻撃性(支)⇔反応的攻撃性	.67	.60	.75
能動的攻撃性(利)⇔反応的攻撃性	.57	.45	.67
能動的攻撃性(支)⇔能動的攻撃性(利)	.75	.73	.75

能動的攻撃性(支)は支配的能動的攻撃性，
能動的攻撃性(利)は利己的能動的攻撃性。

斜交3因子モデルでは，男子，女子，全体いずれもAICの値が斜交2因子モデルよりさらに減少し，GFI，AGFI，CFIの値はすべて.90以上，RMSEAも.10未満の値を示し，良好な適合度が示された。特に男子では，RMSEAが.05を下回り，すべての適合度指標で基準をクリアすることが明らかになった。以上の結果から，当初の予測どおり，中学生の攻撃性は斜交3因子モデルによって最も適合のよい説明が可能であることが明らかにされ，仮説1-2は男子，女子，全体いずれでも支持された。

斜交3因子モデルにおける標準化係数は，Table 2に示すように，男子，女子，全体いずれもすべて0.1%水準で有意となった。係数は最低で.53，最高で.96とおしなべて高い値を示している。各潜在変数に対する係数の相対的な高さには類似したパタンが現れており，反応的攻撃性は報復意図に，支配的能動的攻撃性は仲間支配欲求に，利己的能動的攻撃性は欲求固執に相対的に高い係数を示している。

斜交3因子モデルにおける因子間相関は，男子，女子，全体いずれでも2つの能動的攻撃性の間に.73～.75の高い相関が見られた。また，反応的攻撃性と2つの能動的攻撃性との間には，全体と男子では，2つの能動的攻撃性間の相関よりも低い相関が見られた(r=.45～.67)。児童対象に行動傾向の観点から作成された従来の尺度では，能動的攻撃性と反応的攻撃性の相関はDodge & Coie (1987) で.76，Poulin & Boivin (2000a)で.82であり，これらに比べて，本研究の相関は相対的に低い値にとどまった。

反社会的行動欲求の因子分析

反社会的行動欲求を測定する14項目について，全体のデータを用いて主因子法による因子分析を行った。その結果，固有値1以上の因子が3因子抽出され(初期の固有値は第1因子から順に，5.79, 1.29, 1.12；累積寄与率は58.53%)，この3因子解をプロマックス回転させたところ，Table 4に示す因子パタン行列が得られた。第1因子は，[2]「人を脅して嫌がることを無理にさせる」，[1]「人の持ち物を壊したり隠したりする」，[4]「他の生徒に乱暴なことをする」といった項目に高い

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Table 4 反社会的行動欲求の因子パタン行列（プロマックス回転後）

項　　目	F1	F2	F3
[2]人を脅して嫌がることを無理にさせる	**.81**	-.05	.08
[1]人の持ち物を壊したり隠したりする	**.69**	-.17	.22
[4]他の生徒に乱暴なことをする	**.64**	.01	.03
[3]人の傘や持ち物を勝手に使う	**.57**	.05	.01
[10]わざと学校のガラスや壁を壊す	-.05	**.75**	.00
[9]お金を払わないで店から品物を取ってくる	-.07	**.69**	.08
[14]規則違反の服装や髪型をする	-.16	**.54**	.24
[5]人を脅して，お金や物を取り上げる	.36	.48	.00
[12]人の自転車に黙って乗る	.40	.46	-.21
[13]道具を使って人を傷つける	.38	.40	-.11
[8]廊下で騒いだり遊んだりして教室の授業をじゃまする	-.03	**.39**	.19
[6]他の生徒を無視したり仲間はずれにする	-.03	.08	**.74**
[7]他の生徒の悪口や秘密を言いふらす	.09	.00	**.62**
[11]自分より弱い者に，いじわる・嫌がらせをする	.22	.09	**.51**
因子間相関		F2	F3
	F1	.67	.58
	F2	—	.47

因子負荷量の太字は各下位尺度の構成項目であることを示す。

因子負荷量があり，他者を支配し，その身体や所有物に危害を加える「暴力・いじめ」因子と解釈された。第2因子は，[10]「わざと学校のガラスや壁を壊す」，[9]「お金を払わないで店から品物を取ってくる」，[14]「規則違反の服装や髪型をする」などの項目に高い因子負荷量を示し，公共のルールを侵すことをベースに，公共の財産や商品に対する侵害を表す因子である。「破壊・窃盗・違反」と解釈された。第3因子は，[6]「他の生徒を無視したり仲間はずれにする」，[7]「他の生徒の悪口や秘密を言いふらす」，[11]「自分より弱い者に，いじわる・嫌がらせをする」に高い因子負荷量があり，「関係性攻撃・いじめ」因子と解釈された。なお，男女別にも同じ手法で因子分析を行ったところ，ほぼ同様の因子構造が見られた。特定の因子に対して.30以上の負荷量を持ち，他の因子の負荷量が.30未満の項目のみから3つの因子の下位尺度を構成した（「暴力・いじめ」は項目番号[2], [1], [4], [3]；「破壊・窃盗・違反」は項目番号[10], [9], [14], [8]；「関係性攻撃・いじめ」は項目番号[6], [7], [11]）。各尺度のα係数と男女別・全体の平均と*SD*，性差についての*t*検定結果をTable 5に示す。「暴力・いじめ」は男子が，「関係性攻撃・いじめ」は女子が有意に高かった。これらの結果は身体的攻撃が男子に多く，関係性攻撃が女子に多いというCrick & Grotpeter (1995) の結果と一致する。また「破壊・窃盗・違反」では女子が高い有意傾向が得られたが，これは[14]の服装・髪型の違反で女子が有意に高い結果が反映されたもので（女子平均1.98，男子平均1.53；$t(547.30)=-4.06$, $p<.001$），服装や髪型に対する女子の関心の高さを反映したものと推察される。

2種類の能動的攻撃性・反応的攻撃性と反社会的行動欲求，抑うつ傾向との関連の検討

2種類の能動的攻撃性・反応的攻撃性と反社会的行動欲求，抑うつ傾向との相関係数をTable 6に示す。さらにこれらの関連性を検討するために，Figure 2に示すモデル（モデル1）を構築し，共分散構造分析による検討を加えた。分析にはSPSS社製のAMOS 5.0を使用した。パラメターの推定は最尤法によった。その結

Table 5 反社会的行動欲求下位尺度の平均，*SD*，α係数と性差

下位尺度	全体 平均（*SD*）	α	男子 平均（*SD*）	α	女子 平均（*SD*）	α	性差 *t*値	*df*
暴力・いじめ	6.92(3.52)	.79	7.25(3.61)	.76	6.54(3.40)	.83	2.48*	601
破壊・窃盗・違反	5.77(2.95)	.69	5.56(2.90)	.70	6.00(2.99)	.68	-1.85†	601
関係性攻撃・いじめ	5.80(2.92)	.75	5.51(2.72)	.69	6.12(3.09)	.79	-2.57**	569.32

「関係性攻撃・いじめ」は等分散性が保証されず，ウェルチの法によった。
†$p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Table 6 反応的・能動的攻撃性と抑うつおよび反社会的行動欲求との相関係数

問題行動/攻撃性		報復意図	怒り	仲間支配	攻撃有能	欲求固執	攻撃評価
抑うつ	男子	.26***	.36***	.21***	.05	.13*	.15*
	女子	.24***	.41***	.24***	.15**	.19***	.14*
	全体	.24***	.40***	.21***	.10*	.16***	.12**
暴力・いじめ	男子	.46***	.34***	.42***	.43***	.38***	.35***
	女子	.47***	.29***	.54***	.55***	.35***	.40***
	全体	.46***	.30***	.48***	.48***	.36***	.38***
破壊・窃盗・違反	男子	.32***	.16***	.31***	.44***	.36***	.30***
	女子	.27***	.17**	.31***	.35***	.33***	.22***
	全体	.29***	.17***	.30***	.40***	.35***	.24***
関係性・いじめ	男子	.35***	.28***	.29***	.35***	.30***	.31***
	女子	.43***	.39***	.46***	.46***	.25***	.27***
	全体	.38***	.35***	.36***	.40***	.28***	.27***

*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

Table 7 攻撃性・抑うつ・反社会的行動欲求モデルの適合度指標

		χ^2	*df*	有意確率	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
全体	モデル1	159.02	26	.000	.951	.897	.930	.092	217.022
	修正モデル	161.78	29	.000	.951	.907	.930	.087	213.75
男子	モデル1	67.30	26	.000	.959	.914	.954	.071	125.301
	修正モデル	68.48	28	.000	.958	.918	.955	.068	122.48
女子	モデル1	112.86	26	.000	.931	.854	.916	.108	170.86
	修正モデル	113.07	30	.000	.931	.873	.920	.099	163.07

果，Table 7に示すように，モデル1は男子ではほぼ良好な適合度が示されたものの，女子でAGFIとRMSEAが基準を満たさず，全体でもAGFIが.90未満となり満足な適合度が得られなかった。そこで，男子，女子，全体のそれぞれにおいてモデル1で有意ではなかった標準化係数を削除し，この修正モデルについて再度共分散構造分析を行ったところ，Table 7に示すように，男子，女子，全体のいずれにおいても適合度の改善が見られた。男子と全体では良好な適合度が確認され，女子でもAGFIの値がやや低いものの，RMSEAは.10未満となり，ほぼ満足な適合度が示された。修正モデルの標準化係数，相関係数，重決定係数をFigure 2に示す。

まず反社会的行動欲求との関連について検討する。モデル1においても修正モデルにおいても，支配的能動的攻撃性は男子，女子，全体いずれの場合にも標準化係数は一貫して有意であった。また，利己的能動的攻撃性は，モデル1，修正モデルいずれにおいても男子の場合のみ標準化係数が有意となり，女子では有意な関連が見られなかった。しかし女子では，反社会的行動欲求は支配的能動的攻撃性と高い正の関連が見られたので，仮説2はほぼ支持されたと言えよう。一方，反応的攻撃性は反社会的行動欲求に対して男子の場合のみモデル1，修正モデルいずれでも標準化係数が有意となったが，女子では有意とならなかった。

抑うつ傾向との関連については，反応的攻撃性から抑うつへの標準化係数が，モデル1においても修正モデルにおいても男子・女子・全体いずれでも一貫して有意となり，反応的攻撃性が高いほど抑うつ傾向が高まることが明らかにされ，仮説3-1が支持された。一方，支配的能動的攻撃性ならびに利己的能動的攻撃性から抑うつ傾向への標準化係数は男子・女子・全体いずれの場合も有意とはならず，仮説3-2が支持された。反応的攻撃性と抑うつ傾向は，仲間や親からの拒否・被迫害経験という共通の背景を持つことにより，正の関連が予測されるが，能動的攻撃性は，反応的攻撃性の影響を除外した場合，抑うつと共通の形成要因を持たないため，抑うつ傾向とは正の関連が見られないとする当初の予測は，男女いずれの場合も支持された。

考　察

本研究では，内的特性の観点から中学生の反応的攻撃性・能動的攻撃性の個人差を捉え，その因子構造を明らかにすることと，これらの攻撃性と反社会的行動欲求ならびに抑うつ傾向との関連性が検討された。

検証的因子分析の結果，中学生の攻撃性は反応的攻

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

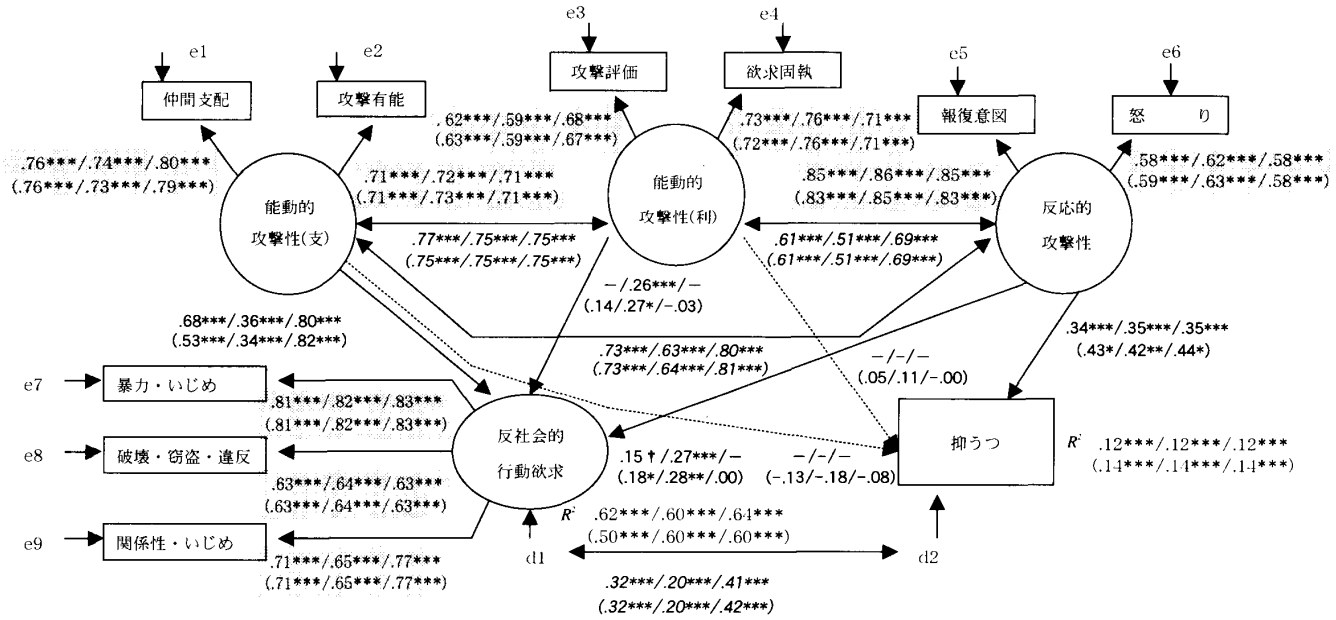

Figure 2 能動的攻撃性・反応的攻撃性と反社会的行動欲求・抑うつ傾向との関連

楕円で示す変数は潜在変数，方形で示す変数は観測変数。
点線矢印はモデル1には含まれたが，有意でなかったため修正モデルで削除されたもの。
上段は修正モデルによる標準化係数，下段カッコ内はモデル1による標準化係数を表記。
それぞれ左から全体，男子，女子の順で記載。有意水準は† $p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$
網掛け部分の数値は潜在変数から指標変数への標準化係数，斜字体は相関係数を示す。
能動的攻撃性（支）は支配的能動的攻撃性，能動的攻撃性（利）は利己的能動的攻撃性を表す。

撃性，支配的能動的攻撃性，利己的能動的攻撃性の斜交3因子モデルの適合度が男女とも最も高いことが明らかにされた。この結果は，従来児童を対象として，行動傾向の観点から観測されてきた能動的攻撃と反応的攻撃に対応する構成概念が，中学生では，内的特性の観点から作成された自己報告尺度でも認められ，個人差の測定が可能であることを意味している。これは本研究で使用された攻撃性尺度の因子的妥当性を支持する結果とも言えよう。

また，児童を対象に教師評定尺度により能動的攻撃と反応的攻撃の相関を検討した従来の研究では，両者の間にかなり高い相関が認められてきた(Dodge & Coie, 1987では.76；Poulin & Boivin, 2000aでは.82)。しかし，本研究では，2つの能動的攻撃性と反応的攻撃性の相関は.45〜.75の範囲にあり，中学生の場合には，従来児童において考えられていたよりも，これらの構成概念がより明確に分離・測定が可能であることが示された。ただし，女子の場合は男子に比べるとやや相関が高く，支配的能動的攻撃性と反応的攻撃性との間には，利己的能動的攻撃性と同程度に高い.75の相関が見られていることには留意すべきである。これは男子に比べて女子のほうが，攻撃行動によって仲間を支配しようとする傾向が，自分に被害を与えた者に対して怒り，報復しようとする傾向とより密接に関連していることを意味する。従来の研究では，主に男子が対象となっており，女子についての知見の蓄積が不足している。今後の研究においては本研究の結果を踏まえ，性差についても十分な検討が必要である。

次に，本研究では共分散構造分析の結果，性別により若干の相違はあるものの，反応的攻撃性と能動的攻撃性は，反社会的行動欲求と抑うつ傾向に対して異なった関連性を示すことが明らかにされた。

反社会的行動欲求については，反応的攻撃性の影響を統制してもなお，能動的攻撃性は有意な正の関連を示すことが予測された。男子では支配的，利己的のいずれの能動的攻撃性も反社会的行動欲求と正の関連を示し，女子でも支配的能動的攻撃性が正の有意な関連を示した。これらは仮説2を支持する結果である。本研究では実行水準ではなく欲求水準で反社会的行動傾向を測定しているにすぎないが，児童期の能動的攻撃行動傾向が青年期の非行行為や非行関連暴力，反抗挑戦性障害傾向や行為障害傾向を予測することを示した諸研究（Brendgen et al., 2001；Vitaro et al., 1998）や能動的攻撃行動傾向が深刻で暴力的な犯罪・非行を犯しやすいサイコパシー傾向と関連があることを示したRaine et al.（2006）と整合する結果と言える。中学生

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

時の能動的攻撃性,特に支配的能動的攻撃性の高さは,現時点での非行・犯罪傾向のひとつのリスクファクターとして考慮されるべきことが示唆された。

また,反社会的行動欲求に対して,男子の場合は反応的攻撃性もまた低いながらも正の有意な関連を示したが,女子の場合は有意な関連はみられなかった。本研究で使用された反応的攻撃性尺度の報復意図の項目中の嫌悪事象は,「いやなことをされる」,「仲間はずれにされる」など,他者から妨害や攻撃を受けた事態である。本研究の結果は,男子の場合は,こうした対人的嫌悪事象に直面した時,仲間を支配し,損害を補償するといった道具的な目標とは独立に,純粋に嫌悪事象に対して怒りをぶつけ,報復を加えるためだけに反社会的行動への欲求が高まるのに対して,女子の場合はそうはならないことを意味している。こうした性差が見られた理由について,本研究の結果のみでは明確なことは言えない。ただ,一般に女子中学生は男子中学生よりも,相互尊重,親密性,同調性といった仲間への欲求が強いため(榎本,2000),対人的嫌悪事象に直面した時,女子は相手との関係への配慮などから,怒りや報復意図を明確な反社会的行動として直接表出する傾向が男子に比べて弱く,結果としてこうした性差が表れたのかもしれない。反応的攻撃性と反社会的行動欲求との関連は今後さらに検討が必要である。

抑うつ傾向との関連については,男女いずれも反応的攻撃性のみが正の関連を示し,能動的攻撃性は関連を示さないことが明らかにされた。この結果はいずれも当初設定した仮説3-1,3-2を支持するものであった。これらの結果は,児童期の反応的攻撃行動傾向が,不安障害や引っ込み思案などの内在化問題を予測したBrendgen et al.(2001)やVitaro et al.(1998)と整合するものである。なお,青年の行為障害と大うつ病性障害との間にはしばしば高い併存率が指摘されてきたが(Birmaher, Ryan, Williamson, Brent, Kaufman, Dahl, Perel, & Nelson, 1996),本研究の結果から,これは部分的には怒り,報復意図といった反応的攻撃性により引き起こされている可能性が指摘できる。

本研究では,反応的攻撃性の形成要因には,親や仲間からの拒否や被迫害経験という抑うつ傾向の形成要因と共通する要因が含まれるが,能動的攻撃性の形成要因は攻撃行動に対する正・負の強化の直接・間接の学習経験の多さであって,抑うつ傾向とは共通の形成要因が含まれないことから仮説3-1,3-2が導かれた。本研究では攻撃性の形成要因を直接扱っていないので断定はできないが,本研究の結果は上記の推論と一致するものと言えよう。ただし,北米の黒人低所得層を対象とした研究では,能動的攻撃性の形成要因のひとつに挙げられてきた,近隣・家庭での攻撃行動の観察経験も,殺人,拳銃やナイフなどによる脅し,強奪,誘拐,強姦などの凶悪犯罪を見聞きした経験を含む場合,児童の抑うつや不安傾向を高めることが示唆されている(Kliewer, Leopore, Oskin, & Johnson, 1998)。本研究の対象者は低所得階層に限定されているわけではないし,彼らが経験してきたと思われる近隣や家族での暴力への暴露経験とは量的にも質的にも異なると思われる。よって,本研究では能動的攻撃性と抑うつ傾向との関連が見られなかったものと推察されるが,犯罪多発地域の児童生徒を対象としての暴力への暴露経験と能動的攻撃性の関連は改めて検討する必要があるだろう。

本研究の意義と今後の課題

以上に述べたように,中学生を対象に内的特性の観点から捉えた場合,能動的攻撃性(支配的,利己的)と反応的攻撃性に対応する因子が認められ,前者が反社会的行動欲求と,後者が抑うつと,それぞれ異なった心理社会的不適応と関連を示すことが明らかにされた。これは児童期に行動傾向の観点から捉えた能動的・反応的攻撃の個人差と,青年期の心理社会的適応との関連を検討したBrendgen et al.(2001)やVitaro et al.(1998)と整合する結果であり,中学生において内的特性の観点から能動的攻撃性・反応的攻撃性を捉え,その個人差を自記式尺度で測定することが妥当で有意義であることを示すものと言えよう。ただし,本研究で明らかにした反社会的行動欲求と抑うつ傾向に対する反応的攻撃性および能動的攻撃性の関連は併存的な関連性に過ぎず,今後は縦断的研究により,因果関係の解明に努める必要はある。また,本研究では反社会的行動傾向を欲求の水準で捉えたが,今後は実行水準での反社会的行動への傾向と反応的攻撃性・能動的攻撃性との関連も検討されるべきである。今後は,引き続き能動的攻撃性が特に関連すると思われる行為障害傾向,反抗挑戦性障害傾向や,反応的攻撃性が特に関連すると思われる親密な異性への暴力行為や不安障害傾向など,Brendgen et al.(2001)やVitaro et al.(1998)で検討された要因を取り上げ,能動的攻撃性と反応的攻撃性の中学生の心理社会的適応に対する特異的な影響を検討することが必要である。近年,Raine et al.(2006)は,児童期・青年期の能動的攻撃性の高さならびに反応的攻撃性の高さと青年期以降の精神病理との

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

関連について，前者はサイコパシー傾向に，後者は統合失調症傾向にそれぞれつながっていくという発達精神病理学的な仮説を提唱している。青年期の攻撃性を能動的と反応的の観点から捉え，その現在および将来における心理社会的不適応に対する独自の寄与を明らかにする試みは，発達精神病理学の新たな知見の蓄積に貢献することが期待できる。本研究はこの試みのひとつと位置づけられよう。

引用文献

Birmaher, B., Ryan, N. D., Williamson, D. E., Brent, D., Kaufman, J., Dahl, R. E., Perel, J., & Nelson, B. (1996). Childhood and adolescent depression : A review of the past 10 years. Part I. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **35**, 1427-1439.

Brendgen, M., Vitaro, F., Tremblay, R. E., & Lavoie, F. (2001). Reactive and proactive aggression : Predictions to physical violence in different contexts and moderating effects of parental monitoring and caregiving behavior. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **29**, 293-304.

Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1996). Social information-processing mechanisms on reactive and proactive aggression. *Child Development*, **67**, 993-1002.

Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.

Day, M. D., Bream, L. A., & Pal, A. (1992). Proactive and reactive aggression : An analysis of subtypes based on teacher perceptions. *Journal of Clinical Child Psychology*, **21**, 210-217.

Dodge, K. A. (1991). The structure and function of reactive and proactive aggression. In D. J. Pepler & K. H. Rubin (Eds.), *The development and treatment of childhood aggression* (pp. 201-218). Hillsdale, NJ : Lawrence Earlbaum.

Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1146-1158.

Dodge, K. A., Lochman, J. E., Harnish, J. D., Bates, J. E., & Pettit, G. S. (1997). Reactive and proactive aggression in school children and psychiatrically impaired chronically assaultive youth. *Journal of Abnormal Psychology*, **106**, 37-51.

榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453. (Enomoto, J. (2000). Friendship among adolescents : Needs and their relation to emotions and activities. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 444-453.)

Feshbach, S. (1964). The function of aggression and the regulation of aggressive drive. *Psychological Review*, **71**, 257-272.

Goldstein, A. P., Glick, B., & Gibbs, J. C. (1998). *Aggression replacement training : A comprehensive intervention for aggressive youth* (rev. ed.). Champaign, IL : Research Press.

濱口佳和 (2004). 反応的攻撃性 (reactive aggression) 尺度 (中学生版) の作成―反応的・道具的攻撃性尺度 (RIS 中学生版) の改訂(2)― 日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集, 493. (Hamaguchi, Y.)

濱口佳和 (2005). 自記式能動的攻撃性尺度 (中学生用) の構成 カウンセリング研究, **38**, 183-194. (Hamaguchi, Y. (2005). Study on construction of the self-report type proactive aggression scales for junior high school students. *Japanese Journal of Counseling Science*, **38**, 183-194.)

Hare, R. D., Clark, M., Grann, M., & Thornton, D. (2000). Psychopathy and the predictive validity of the PCL-R : An international perspective. *Behavioral Sciences and the Law*, **18**, 623-645.

Kliewer, W., Leopore, S. J., Oskin, D., & Johnson, D. (1998). The role of social and cognitive process in children's adjustment to community violence. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **66**, 199-209.

Laing, H., & Eley, T. C. (2005). A monozygotic twin differences study of nonshared environmental influence on adolescent depressive symptoms. *Child Development*, **76**, 1247-1260.

前田健一・中條和光・樋口匡貴・山口修司 (2001). 暴力行為等の問題行動に関する発達的研究(2) 日本

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

心理学会第65回大会発表論文集, 692. (Maeda, K., Chujo, K., Higuchi, K., & Yamaguchi, S.)

Poulin, F., & Boivin, M. (2000a). Reactive and proactive aggression : Evidence of a two-factor model. *Psychological Assessment*, **12**, 115-122.

Poulin, F., & Boivin, M. (2000b). The role of proactive and reactive aggression in the formation and development of boys' friendships. *Developmental Psychology*, **36**, 233-240.

Price, J. M., & Dodge, K. A. (1989). Reactive and proactive aggression in childhood : Relations to peer status and social context dimensions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **17**, 455-471.

Raine, A., Dodge, K., Loeber, R., Gatzke-Kopp, L., Lynam, D., Reynolds, C., Stouthamer-Loeber, M., & Liu, J. (2006). The Reactive-Proactive Aggression Questionnaire : Differential correlates of reactive and proactive aggression in adolescent boys. *Aggressive Behavior*, **32**, 159-171.

Randloff, L. S. (1977). The CES-D scale : A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-481.

Robertson, J. F., & Simons, R. L. (1989). Family factors, self-esteem, and adolescent depression. *Journal of Marriage and the Family*, **51**, 125-138.

島 悟・鹿野達夫・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, **27**, 717-723. (Shima, S., Shikano, T., Kitamura, T., & Asai, M.)

繁枡算男・柳井晴夫・森 敏昭 (編著) (1999). 心理学セミナーテキストライブラリ＝3 Q&Aで知る統計データ解析—Dos and Don'ts— サイエンス社 (Shigemasu, K., Yanai, H., & Mori, T.)

Slee, P. T. (1995). Bullying : Health concerns of Australian secondary school students. *International Journal of Adolescence and Youth*, **5**, 215-224.

高倉 実・崎原盛造・與古田孝夫・新屋信雄 (2000). 中学生における抑うつ症状と心理社会的要因との関連 学校保健研究, **42**, 49-58. (Takakura, M., Sakihara, S., Yokota, T., & Shinya, N. (2000). Psychosocial correlates of depressive symptoms in junior high school students. *Japanese Journal of School Health*, **42**, 49-58.)

Vernberg, E. M. (1990). Psychological adjustment and experiences with peers during early adolescence : Relational, incidental, or unidirectional relationships ? *Journal of Abnormal Child Psychology*, **18**, 187-198.

Vitaro, F., Gendreau, P. L., Tremblay, R. E., & Oligny, P. (1998). Reactive and proactive aggression differentially predict later conduct problems. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **39**, 377-385.

謝 辞

本研究の実施にあたりご協力いただきました下記の中学校の教職員の皆様，生徒の皆様に深く御礼申し上げます。鉾田市立鉾田南中学校，水海道市立西中学校，つくば市立谷田部中学校，市原市立辰巳台中学校。

(2006.3.16 受稿, '09.4.2 受理)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Appendix

Ⅰ．能動的攻撃性尺度

a．仲間支配欲求（8項目）

(P24)自分の思い通りに動いてくれる仲間が欲しい。
(P28)自分が頼めば，どんなお使いでもしてくれる仲間が欲しい。
(P36)自分がやりたくないことを，何でもかわりにやってくれる仲間が欲しい。
(P51)仲間が自分の言いなりになるのはゆかいだ。
(P44)自分が思うように人を働かせるのは，いい気持ちだ。
(P8)仲間を自分の思うとおりに動かしたいと思う。
(P27)他の人の親友でも，自分が気に入ったら独占したいと思う。
(P48)私は仲間の中では，リーダーのようにふるまいたい。

b．攻撃的問題解決方略への有能感（8項目）

(P21)わたしがきついことを言えば，だいたい相手は引き下がる。
(P45)うるさいことを言う人でも，わたしがきついことを言えば，黙ってしまう。
(P41)うるさいことを言う人は，私が少し乱暴なことをすれば，何も言わなくなる。
(P49)わたしがみんなに呼びかけて無視すれば，うるさいことを言う人でも，黙らせられる。
(P25)わたしが「仲間はずれにする」と言えば，相手はだいたい言うことを聞く。
(P5)仲間をおどして言うことをきかせるのはかんたんだ。
(P9)何かもめた時，言葉で相手を言い負かすのは得意だ。
(P20)わたしには，よく言うことをきく子分がいる。

c．攻撃的行動への肯定的評価（9項目）

(P42)仲間にきついことを言う人は，みんなに嫌がられる。(＊)
(P34)少しきついことを言っても，相手の心は傷つかない。
(P46)無視や仲間はずれをする人は，仲間から信頼されない。(＊)
(P38)乱暴なことをする人は，仲間にけいべつされる。(＊)
(P47)誰かとけんかになった時，相手の言い分も聞くようにしている。(＊)
(P26)少したたいたぐらいでは，相手の心は傷つかない。
(P18)どんな理由があっても，暴力は許されない。(＊)
(P22)どんなにきらいな相手でも，無視することはいけないことだ。(＊)
(P39)電車やバスですわっているときに，ぐあいの悪そうな人が前にいても，自分の席はゆずりたくない。

d．個人的欲求への固執（5項目）

(P7)どんなにほしい物でも，力ずくで手に入れようとは思わない。(＊)
(P11)人を押しのけてまで，ほしい物を手に入れようとは思わない。(＊)
(P3)ほしい物は腕ずくででも取る。
(P6)ほしい物をうばい合うのはみにくいことだ。(＊)
(P15)人がどう思おうと，ほしい物は手に入れたい。

Ⅱ．反応的攻撃性尺度

a．報復的意図（7項目）

(R14)いやなことをされたとしても，やり返そうとは思わない。(＊)
(R2)ひどいことをされても，しかえししようとは思わない。(＊)
(R5)乱暴なことをされたら，同じくらいひどいめにあわせたい。
(R20)じゃまをされたら，やりかえさずにはいられない。
(R23)いやなことをされたら，倍にして返したい。
(R8)もんくを言われたら，逆に相手をやっつけたくなる。
(R17)仲間はずれにされたら，何かしかえしをしたくなる。

b．怒　り（5項目）

(R27)怒りは長く続くほうだ。
(R22)いったんはらをたてると，なかなかおさまらない。
(R28)はらがたつときは，おさえられないほど怒りがこみあげる。
(R25)あたまにきたことは，いつまでもわすれない。
(R1)ちょっとしたことでもカッとなりやすい。

全42項目，(＊)は逆転項目

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Proactive-Reactive Aggressiveness and Psycho-Social Maladjustment in Junior High School Students : Types of Aggressiveness, Desire for Antisocial Behavior, and Depressive Tendencies

Yoshikazu Hamaguchi (Graduate School of Comprehensive Human Science, Institute of Psychology, University of Tsukuba), Masayasu Ishikawa (University of Tsukuba Education Bureau of Laboratory Schools) and Shoko Mieno (Aoba, Children's Developmental Support Center) *Japanese Journal of Educational Psychology, 2009, 57, 393—406*

The purposes of the present study were to investigate the factor structure of proactive-reactive aggressiveness and to study the relationships among proactive-reactive aggressiveness, desire for antisocial behavior, and depressive tendencies in junior high school students. The participants (603 junior high school students) completed a questionnaire that included proactive-reactive aggressiveness scales, the CES-D (depressive tendencies) scale, and 14 items about desire for antisocial behavior. Confirmatory factor analysis revealed the optimal goodness-of-fit for an oblique three-factor model of aggressiveness, in which the factors were dominating proactive, egocentric proactive, and reactive. Structural equation model (SEM) analysis revealed that reactive aggressiveness was positively related to depressive tendencies, whereas neither dominating nor egocentric proactive aggressiveness was. The structural equation model analysis further revealed that all 3 of the aggressiveness factors were related to the boys' desire for antisocial behavior, whereas only dominating proactive aggressiveness was related to the girls' desire for antisocial behavior. These results suggest that reactive-aggressiveness and proactive-aggressiveness play different roles in the psycho-social adjustment of junior high schools students, and that there are significant sex differences in the interrelationships among the 3 aggressiveness factors studied.

Key Words : reactive aggressiveness, proactive aggressiveness, depressive tendencies, desire for antisocial behavior, junior high school students

NII-Electronic Library Service